

福島原発事故から二年余を経た被災地訪問

フクシマ事故の風化を許さず

被災者との交流を深め、支援・連帯を強め広げよう！

これまでも私たちは「救援関西」として、ベラルーシのチェルノブイリ被災者の方々とともに福島原発事故被災地を訪問して交流したり(2012年4月)、楢葉町や飯舘村から避難している被災者の方々を関西にお招きして講演・交流会を開いたり、という取り組みを行ってきました。また振津は、2011年4月から毎月、福島に通い続け、福島や関西の様々な方々とつながりながら、医師として被災地の方々の「健康相談」などに取り組んできました。

事故から二年以上を経ても、まだ事故は収束していません。被災地では放射能と向き合いながらの生活の中で様々な問題が起きています。それにもかかわらず関西では、残念ながら、日々の生活に追われて暮らす多くの人々の意識から「フクシマ」が遠のいてしまっている現実があります。そのような中で、政府は福島事故の責任をちゃんと認めず、被災者への施策をまともに行なっていません。そればかりか政府と電力会社・原子力産業が一体となって、原発の再稼働や海外輸出と、原発推進の巻き返しを図っています。私たちは、フクシマ事故被災地の皆さんとしっかりとつながりながら、「風化」を許さず、連帯・支援を続けたいと思います。そして、私たちの足下にある関西の原発の再稼働反対をはじめ、「脱原発」の取り組みにも引き続き積極的に参加してゆきたいと思います。

そんな思いから、これまでの交流の中で、つながりを持ってきた方々を福島の事故被災現地にお訪ねして交流を深め、被災地の実情や人々の思いを直接に見聞きたいという声が「救援関西」のメンバーから上がりました。そして6月29日～7月1日、有志で、福島へ「交流の旅」に出かけることになりました。参加したのは、運営会議に参加している中心メンバー、ニュースの発送作業や救援バザーなど「体力」のいる仕事をいつも手伝って下さっている「救援関西の縁の下の力持ち」メン



あびす庵前で高橋夫妻・藤島さんと

バーの計6名です。(ある程度以上の年齢?の女性ばかりの「大阪のおばちゃん」訪問団です。)訪問先で見聞きたこと、交流の内容や参加者の感想を、次ページ以降に掲載しています。

事故二年余を経た被災地を訪れ、訪問団メンバーそれぞれが、事故のもたらしているものの重さを改めて受け止めた旅になったと思います。放射能汚染によって豊かな自然と長い歴史ある文化を享受できなくなってしまった悔しさ、ヒバクによる健康不安、生活の先行きが見えない不安、いつ終わるか知れない放射能との闘い、事故よってもたらされた地域の人々への分断…さまざまな困難の中で、皆さん、それぞれに悩みながらも、前を向いて踏ん張っておられます。生活を取り戻すため、子ども達を守るために、懸命に努力されている皆さんに、各地でお会いしました。今回の「交流の旅」を、またひとつのきっかけにして、私たちもフクシマの皆さんとつながり続け、交流を深めてゆきたいと思います。そしてフクシマ事故被災地への支援・連帯の取り組み、事故を風化させない取り組み、チェルノブイリ被災地とフクシマを繋ぐ取り組みを続けたいと思います。さらに、脱原発をめざし「フクシマを核時代の終わりの始まりに」する取り組みを進めてゆきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

快く私たちの訪問を受け入れて下さり、また、いろいろとお世話して下さいました福島県の皆さん、おひとりおひとりに、心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

「救援関西」事務局・振津かつみ

福島訪問 1 日目(6月29日)

フクシマ後の福島を訪れて

《フクシマ後の時代》

朝7時の新大阪発「のぞみ207号」で、念願の福島訪問がスタートしました。

めったに乗らない新幹線。資料や地図を見たり、大阪のおばちゃん標準装備の「あめちゃん交換」などをし、私たち「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」福島訪問団 5 人はちょっと行楽気分でした。しかし、東京で振津さんと合流し、9時48分に初めての東北新幹線「やまびこ」に乗り換え、福島に近づくと、いつの間にか、線量計がプツッとふれていました。穏やかな光を浴びて、新幹線の中で線量は $0.15 \mu\text{Sv/h}$ になっていました。大阪の空間線量は $0.05 \sim 0.07 \mu\text{Sv/h}$ なので約3倍でしょうか。

福島駅で下車し、にぎやかな駅前でふと線量計を見ると、歩道 $0.36 \mu\text{Sv/h}$ 、駅の樹木の横の溝 $1.89 \mu\text{Sv/h}$ でした。私たちは確実に「福島後」の世界に生きているのだなと感じました。

《「カーちゃんの力」のお店》

駅前のメインストリートに、昨年12月に関西に来ていただいた渡邊とみ子さんの「カーちゃんの力」プロジェクトが経営する



カフェ&ショップ「カーちゃん ふるさと農園わいわい」がありました。ここでランチ。すり下ろしたまねぎがたっぷり乗ったポークソテー、野菜の副菜がいっぱい、いろいろ付いていて、大満足でした。放射能汚染のために、ふるさと飯館村を離れ、放射能自主測定という犠牲を払いながら、貴重な飯館村の作物の継承をはかり、かあちゃん達の働ける場所を作ってきたとみ子さんたちの、手作りの味でした。帰りがけに、とみさんが忙しい中を会いに来てくれました。ヤーコンやりんご・エゴマ・カボチャで畑が忙しい上にイベントで寝る間もないそうです。

《菅野さんと飯館村へ》

菅野哲さんの案内で、飯館村、南相馬市をまわりました。菅野さんは、娘さん達家族と離れ離れになり、奥さんと高齢のお母さんとの3人での福島市内の借り上げ住宅で避難生活をされています。事故前は230本の銀杏と2.5haの高原野菜栽培農家だったとうかがいました。3.11直後は、地震で電気・水道・電話がストップしたなか、原発事故で双葉地方の人々が村に避難してきて、避難所を開設したそうです。その後雪とともに高濃度の放射能が降り、空間線量44.7 μ Sv/hと報道されたが、国や県からは避難指示が出ない。長崎大学の教授の「安全だ」の講演会、「指示がないから」と村も避難を拒否。3月28日に今中哲二さん達が汚染状況の調査を開始し、村長に避難を提言したが、保安院は「飯館



は避難の必要なし」と発表。混乱の中、放置され被曝させられた。当初は家畜の処分を命じられた。そして、結果的に大切にしてきた土地と生活すべてを捨てることになった…と。

福島市から伊達市を通り、飯館村に向かいました。途中、人々が住んでいて、コンビニなどもある地域で、車の中で0.19 μ Sv/h、外は0.3~0.8 μ Sv/hありました。その付近では、除染作業者が数人ずつ作業していましたが、アスファルトの道路上で0.7 μ Sv/h。理屈では分か

っているつもりでしたが除染作業自体がかなり被曝する作業だと心配になりました。

《丁寧に手入れしてきた大事な故郷》

飯館村に入ると、道路脇の神社で4~5 μ Sv/h。さすがに静寂が広がっていきます。全員避難してはいるが、昨年の7月から「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」となった地区もあり、思ったよりパラパラと人の姿がありました。道路もこれまで一度も閉鎖されたことはありません。村役場の近くには「見回り隊」として村民が雇用されて通ってくるし、老人ホームやいくつかの事業所が営業しているので、日常的に通勤して来ている人がいるとのことでした。すぐ横の草地は3~4 μ Sv/h。有名な役場の前のモニタリングポストは立派で、0.57 μ Sv/h。聞くと、自衛隊が600人で役所周りとモニタリングポスト周りを除染したそうです。このモニタリングポストがこの地域の線量として公表されています。村は、



公的には、除染して村民が帰ってくることをめざしているそうです。しかし、山に囲まれた高汚染地で、現実的には、多くの人手をかけ被曝しながら表土を削り、1トン詰めめのビニールの袋に入れられた汚染土の山が「仮、仮置き場」に見渡す限りおかれていても、村全体の1%しか除染は進んでいない現状だそうです。

村役場の近くを外れると、シンとして、山は美しいが、農地は荒れ、よく手入れされた稲田がすべて草地になり、ずっと広がっています。栗や桑や梨の木も雑草に覆われて、誰も実を食べることはありません。「もう3年こうしてあるので、耕作地としてはまったくダメになっている」と菅野さんは悔しそうでした。何十年もかけて、丁寧に作り上げてきた農地は、ダメにしてしまうのは簡単なことで、とりかえしはつきません。菅野さんのお宅の前を通りがかりました。外観は維持しながらも中は朽ちて野生動物が入ってむちゃくちゃだとのこと。草に飲み込まれていく民家。隣近所のところどころ、きれいに草刈りしてある場所もある。「住めないし、被曝するけど、みんな、たまらなくなって草刈りに帰ってきてしまうんだ」「それが住民の気持ちなんだ」「飯舘村は心のよりどころなんです」と、菅野さんは話してくれました。



て、丁寧に作り上げてきた農地は、ダメにしてしまうのは簡単なことで、とりかえしはつきません。菅野さんのお宅の前を通りがかりました。外観は維持しながらも中は朽ちて野生動物が入ってむちゃくちゃだとのこと。草に飲み込まれていく民家。隣近所のところどころ、きれいに草刈りしてある場所もある。「住めないし、被曝するけど、みんな、たまらなくなって草刈りに帰ってきてしまうんだ」「それが住民の気持ちなんだ」「飯舘村は心のよりどころなんです」と、菅野さんは話してくれました。

「一番安心で安全な故郷の空気と水、自分たちで丁寧に作った作物が毒だなんて…」

ベラルーシ、クラスノポリエの女の子、カーチャの詩の一節を思い出しました。

「おばあちゃんは言った。人間は何によって育てられるのか、

それはね、新鮮な空気、澄んだ水、雨で洗われた作物…」

しかし、人々は、家の畑の作物を食べることを恐るようになった」

きっとカーチャのおばあちゃんは、人間が生きるために大事なことをよくご存じだったのでしょ。同じように、きっと菅野さんも、それを大事にされてきたんだろう。

菅野さんは、「皆と同じく飯舘村に帰りたいが、『除染』で自然破壊しても放射能をほんとうに取り除くことはできない。あえて、飯舘村に30年間手を付けるな。」と言われた。重い言葉でした。

《南相馬市へ》



津波跡。今も土台だけが残る。向こうは海

飯舘村を抜けて海側に出ると、最近まで立ち入り禁止だった小高区では、地震と津波の爪痕がそのままの地域が広がっていました。放射能の影響で津波被害があっても立ち入ることができなかった地区です。二年たっても、ほとんど手がつけられなかった、大変な風景が続きます。一度この光景を見たら、これは忘れられないと思います。大勢の人々が暮らしていたはずの街も田畑も何もかもがズドンと海まで空

っぽになっている。家があったと思ったら、外壁だけ残して、中ががらんどうで捨て置かれている。海の水が入ったからなのか、たくさんの人が亡くなったからか、草ボウボウにも森にもならないで、荒れ果てている。

《菅野さんの畑とゑびす庵》

夕刻に福島市に戻りました。もう薄闇がおりてきている中、菅野さん達が、避難先で借りて耕している郊外の畑に連れて行ってもらいました。避難後、仮設住宅に支援物資を運んだり、声を掛けたりしていましたが、長引く避難生活の中で、体調を崩したり閉じこもりがちになる高齢者に、いきがいを作るために共同農場を始めました。初めは、20アールの耕作放棄地から立ち上げましたが、今は1ヘクタールの広い畑が広がり、30種類もの野菜を作っているそうです。きゅうり等の夏野菜が見事に並んでいました。村民15人が顔をそろえます。避難してきていても、土に触れてこそ農家。農業のプロばかりです。「年寄りばかりだから、収穫の時だけ参加のメンバーもいるんだよ」と菅野さんは笑います。「違うんだ！同じように見えても味が違う」とまだ小さいキュウリを取ってくれました。夕食の時に食べたそれは確かにおいしい！菅野さんの鼻が得意そうにぴくぴく動き嬉しそうな様子で、みんななんとも嬉しくなりました。

菅野さんの畑から少しのところ、手打ちうどん屋兼旅の宿をしている「ゑびす庵」に宿泊。夕食交流会をしました。「ゑびす庵」の高橋さんご夫妻は、飯舘村の出身で、福島市に避難している村の人たちに「飯舘の味、なつかしい」と言われるのがうれしいとのことでした。菅野さんと「負けねど飯舘」の佐藤健太さん、楢葉町の佐藤龍彦さんも忙しい中を駆けつけてくれて、被災地の今の問題を話し合う……交流会のつもりでしたが、お酒が入りなんだか分からなくなりました。

長澤由美

二日目(6月30日)

それぞれの「フクシマ」に触れて

朝起きると小雨模様の梅雨景色。朝食後ゆっくりしているとそのうちに子供たちの元気な声が響いてきました。今日参加される「いいだて子どもを守る会」のお母さん達と子ども達が順次集まってきたのです。3人のお父さんを含む総勢は30人余りになりました。子ども達はまだ赤ちゃんから小学生まで年齢は様々だけど元気一杯でまるで保育園のよう。お姉ちゃんが、自然に慣れた様子で姉妹の末の子供の面倒をみている光景は、感心させられるとともに何か懐かしく感じられました。私たち「大阪のおばちゃんたち」は、自分の孫のような子ども達におのずと頬が緩みばなし。その上赤ちゃんを抱っこさせてもらいとても嬉しい思いをさせてもらいました。でもお母さん達の話は深刻でした。放射能汚染のために、あの美しかった飯舘村からの避難生活を強いられている皆さん。本当に「あの原発事故さえなかったら」の思いは共通のものと感じました。

「ようやく福島に馴染んできて、この場がお母さんたちの『なごみ』の場になれるように」「事故当時、食料を買うためにスーパーの行列に子どもを連れて1時間並び、後で放射能のことなど情報を知り悩んだ」「地震の揺れから赤ん坊を必死に守ったけれど、家はオール電化でミルクが作れず、囲炉裏のあった隣の家に助けしてもらった」「医師に相談しても100ミリシーベルト以下なら大丈夫としか言ってもらえなかった」等々。一人一人が皆んなそれぞれに違った「フクシマ」を背負っていて、それぞれの「フクシマ」があるという、こんな当

たり前のこと改めて突きつけられた思いでした。そして被災したお母さん達が「それぞれおかれた状況によって違いがあり、いろんな思いがあるけれど、それによって生じたみぞを埋めていきたい」とも話されていました。「いいたて子どもを守る会」は、もともとは飯舘村から福島市に避難してきたお母さんたちのネットワークとして設立されました。(設立にあたっては、事故前から飯舘村の村作りにかかわってきた NPO「エコロジー・アーキスケープ」(EAS)が支援されました。)その後、少しずつ輪が広がり、もともと福島市や伊達市に住んでいて避難指示をうけることのなかったお母さんたちも、徐々にメンバーに加わってきているようです。

自己紹介もかねて、事故直後の体験とこの二年間の思いをひとりひとり語って頂きました。決して短い時間に語り尽くせるものではありません。「避難後、子どもを作っているかどうか迷った。妊娠してからも、生まれ

てくる子どものことがとても心配だった。でも、やっぱり子どもはかわいい。産んでよかった。」と、涙を浮かべるお母さん。本当にそれぞれのお母さんたちが、それぞれの思いを抱え込みながら、この二年間を過ごしてこられたのだなと感じました。私



たちは、その思いを受け止めるのが精一杯で、返す言葉が見つかりませんでした。

昼食は「えびす庵」自慢の丼いっぱいうどんを皆んなで頂き、もう、たらふく、満足。

午後は「えびす庵」のご主人の案内で(AES の藤島さんも一緒に)磐梯吾妻スカイラインをドライブ。途中硫黄の匂いを嗅ぎながら緑の中の延々と続く急なヘアピンカーブを一路登りました。途中立ち寄った展望台は、期待していた福島盆地の一望どころか霧で全くの視界不良。「霧の中の少女」ならぬ「霧の中のおばちゃん」は「なーも見えなかった」を連発しながら、それでもやっぱり意気軒昂。そして浄土平に到着。丁度日曜日ということもあってか、結構多くの観光客がで賑わっていました。しかしこのレストランで急にどしゃ降りの雨。今度は霧の中ではなく雨の中でもなく、よく晴れた日に再度訪れたいと思ったドライブでした。



「えびす庵」に戻り、お店の大きなこけしが目に留まりました。そこから、女将さんのちよ子さんが、夕方の忙しい時間帯であるにもかかわらず快よく、隣にある「原郷のこけし群・西

田記念館」に案内してくれました。こけしはその土地により違いがあり、11系統もあるそうで、その多さにビックリしました。そしてこけしは、昔、子を間引いてその供養のためと思い込んでいた私は、もともと、東北地方固有の子供の玩具と説明を受け、なぜかホッとしたのでした。

「えびす庵」店主の高橋さん御夫妻はやはり飯舘村からの避難者。心温かいもてなしをしていただき、本当に感謝です。

夕方、飯坂線に飛び乗り、奥州三名湯の一つである飯坂温泉で宿泊しました。

猪又雅子

三日目(7月1日)

福島第一原発重大事故から 2年3か月経つ

福島を 見る！ 知る！ 考える！

7月1日の日曜日、福島県二本松市にある真行寺(浄土真宗)の若い住職からお話を聞きました。

お寺を訪問しますと、境内に子どもたちのかわいいクツがいっぱい並んでいました。このお寺は、境内に幼稚園を併設されていて、子どもたちは、免疫を上げるといわれているということで朝の座禅中でした。この境内には放射線計測器が設置されていました。数値は、0.184マイクロシーベルト/毎時を示し、「決して低くはない」と、感じました。

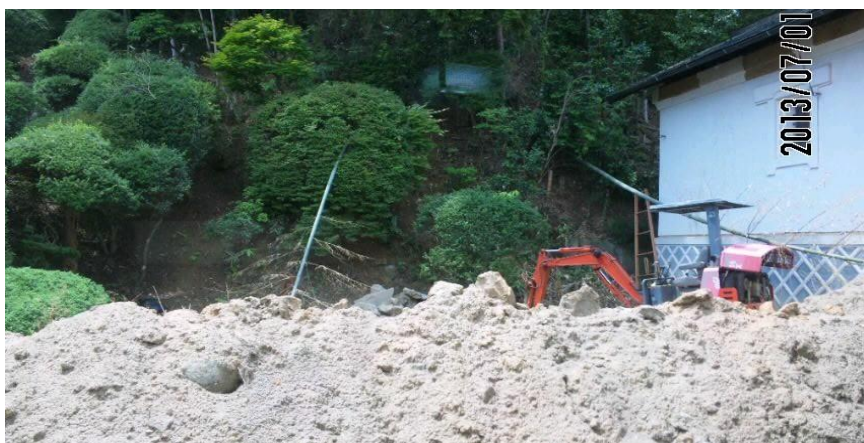
私の子どもぐらい若い住職は、2011年 3月11日、あの出来事が起こる前までは、原子力発電所のことについては、関心がなかったと、「だまされていたんだなあ」と、ポツリとつぶやかれました。(大阪に住んでいる私たちもこんな深刻で、重大な事故は起こって欲しくはないと念じながら、黙認し続けてきた自分の運動の弱さを再確認した思いでした。)

彼の話は続きます。「3月20日頃から、線量計で周辺を測りました。雨樋下では、なんと30~40マイクロシーベルト/時を示しました。(1ヶタ記録を間違えたのかと、この訪問記を書いているとき、あまりの高さに疑ってしまいました。)

幼稚園として子供を預かるために、子どもたちが遊んでいた土を汚染した土から新たな土を入れ替えました。そして、5月から父母から『預かってくれなければ困る』という希望もあり、幼稚園を再開しました。お寺の本堂の裏山の土も放射線量が高いため削り取ったり、母が大切に育てていた庭木も掘り返さざるを得ませんでした。それでも、100人からいた子どもたちは、80人あまりと減りました。子どもたちの命と健康を守るために、どうしたらいいのか、日々悩み葛藤しています。」



真行寺にある放射線計測器



お寺の裏山

「放射能測定器を買って食品の測定をしています。カンパを募り、今年1月にホールボディカウンターを買うことができました。夏休みには、今年も子どもたちの保養を行います。今年は、なんとハワイからオファーがあった」と、話されました。

原発から放出された放射能汚染によって、町はバラバラにされていきます。人々がバラバラにさ

れていくのは本当につらいものです。

- ・ 子どもたちをヒバクから守りたいと思っている親と、あんまり心配することがないよという人たち。
- ・ 正しい情報を知りたいという人と、過敏に反応すると逆にストレスがたまるという人。
- ・ 数値を測っても高くて心配だと、はっきりと言いだせない雰囲気。
- ・ 他の人が引っ越して避難していった家を買って住んでいるけど、本当に大丈夫であろうか。
- ・ 経済的に余裕があり、避難できる人たちと、避難できない人たちの深まる溝。

日常生活の場面でも、子どもたちをできるだけヒバクさせない努力が続いています。

あの日、何も知らずに行動をしていたことを母親は、悔いているとのこと。「放射能が降り注いでいるとき、紙おむつやミルクを購入するために、1時間も2時間も並んで順番を待っていました。子どもと一緒に。本当に何も知らずに子どもをヒバクさせてしまった。」と。

「子どもが通う通学路。その周りの草むらの線量を測ってみますと、極端に高い線量でした。(4マイクロシーベルト/時)そこで、お母さん方が相談して、自らの力で除染した」と、住職は話されました。

小学校低学年の遠足でのこと。目的地までに近くの森を通るが、その道は、1~0.9マイクロシーベルト/時と、汚染されています。学校側は、どうもあらかじめ放射線の測定をしていなかったようです。そこで親達为学校に行き先の変更の申し入れに行ったそうです。「学校の先生方はなにも気をつけていないのだろうか」と、住職は無理解な学校の対応を批判されていました。

大人たちも被害に遭い、苦悩している実情も知りました。妻と子どもを自主避難させ、仕事のためにひとりで地元に残って暮らしているお父さんたちとも、時々会っていろいろと話をするようにしているとのこと。お互いに支え合う輪がますます大切になってきています。そんな中で、あろう事が、放射能の危険性や、原発事故について、公然と話しづらい雰囲気が作られてきています。「100ミリシーベルトまでなら大丈夫だ」「直ちに健康に被害が出ない」など、心配しないでよい、心配する人たちはおかしいという雰囲気作り。ある自民党の女性議員が、「福島では誰一人死んでいない」「原発を再稼働せよ」と主張していましたが、これからも原発を推進し、利権にまともな人々にとっては、福島の犠牲を正しく学ぼうとしないし、深刻な福島の現状を押さえつけようとする大きな動きが働くことでしょう。放射能から子どもたちを守ろうとする人々に対する周囲からの風当たりが強かったり、きつい言葉でいわれのない批難を受けることもあるそうです。

私自身にも同じような経験がありました。もうすでに30数年前の出来事です。和歌山県日高原発建設計

画反対で、日高でピラ入れをしていたときのことを鮮明に覚えています。同じ苦い思いをしたからです。「あんたら、いつから赤になったんや」「どこから金をもろうてピラまきに来てるんや」とか言われたことがあります。原発を推進し、恩恵を受けようとする人たちは、ちっとも変わっていません。人間は少しも進歩していないのでしょうかね、フクシマという深刻な事態になっても、あの頃とちっとも変わっていません。情けない話ですね。

昼からは、福島県郡山市にある「3a 郡山」を訪ねました。「3a 郡山」は、「安全、安心、アクションin郡山」です。子どもたちを守りたい！ふるさとをとりもどしたい！という思いでお母さん方が井戸端会議を重ねていく中で、スタートさせた会です。

この日も数人のお母さんたちが、私たちを迎えてくれました。

母親たちは、自己紹介で、事故時やその後の様子、原発についての考えなどを語られました。事故が起こる前は、「福島に原発があることすら知らなかった。」「原発の怖さなど、知らなかったし、怖いとも思わなかった。」「原発の存在そのものが、私たちの生活にあまり関係があるなど、思ったことはなかった。」など、原発事故によって自分の生活が一変する出来事が降りかかるなど夢にも思っていなかったのです。

会を立ち上げたお母さん方は、勉強会を開き、子どもたちを守るために何をしていくのか、話し合い、取り組んできています。この2年間で、食品の放射能測定、「あんしん野菜販売」の開催、避難や保養情報の共有、支援物資の配分、健康相談会の開催、郡山市へのロビー活動などなど、活動されています。

郡山市のとなりにある須賀川市から見えられたお母さんが、「学校に空調設備を配置して欲しい」と、市のPTA連合からお願いをしましたが、市は、「予算がないので、できない」と返答してきました。

でも、おかしいなあと思いませんか。子どもたちの健康を守るための設備は必要ですし、お金がないのであれば、国の復興予算から出すように、市は、国に要求すべきではないでしょうか。この復興予算では、ある県のゆるキャラ制作費用に使われているなど、本当に必要なところには届いていないのではないかと、憤ってしまいます。

この会の代表をされている野口さんからは、「フクシマのことを知って欲しい」「みんな大丈夫だと思わされていることを知って欲しい」「子どもの保養を」と、訴えられました。フクシマ事故は収束しており、復興に向けて順調にすすんでいるかのようなデマ宣伝に警鐘をうち鳴らさねばなりません。

私たちの体は、放射線が悪さをしても、痛くも、かゆくも感じることはできません。においがしたり、眼が痛くなったり、舌で感じとることや腹が痛くなったりしたら、「これは危ない」と分かるのですが、残念ながら感じ取ることができません。ましてやじわじわと体をむしばみ、10年20年後にガンや白血病になっても原因が分からないとされ、殺されていくことになってしまうのです。

子どもたちにはできるだけヒバクさせない、きめ細かな取り組みを考え、実行し、そして、周りではそ



3aのお母さんたちと

の支援をし続けなければなりません。そんな社会の姿がお互いに共存共栄できる社会づくりの一步ではないかと、つくづく思います。

被災地の被害は、ますます困難な方向へ進もうとしているようにさえ感じます。でも、へこたれず、一つ一つ実現させて

久保きよ子

<福島を訪れての感想>

もう一度事故が起これば…その時はもう遅いよ！



草ボーボーの畑

福島へ被災後初めて行きました。

まず驚いたことは、福島の駅を出て放射線量を測ると、自然のバック・グラウンドより何倍も高い数値が出たことです。福島の人々は、あの事故からずっと放射線を浴びているという現実を見ました。

午後は飯舘村に住んでいた方が、車で案内してくれました。ご自分の畑も見せてくれました。お父様の代から丹精込めて耕し、守ってきた田畑は雑草しか生えていませんでした。大事な田畑を放棄しなければならなかった事を考えると、他人の私でさえ残念無念な気持ちが湧き上がってくる。ご本人さんは

さぞかし眠れぬ日々を過ごしたことでしょう。

次の日は若いお母さん達の話聞くことができました。「放射能の知識がなかったので、震災直後、子どもを連れてスーパーへ買い物に行き、何時間も一緒にスーパーの前で並ばせてしまった。知識があれば外に出さなかったのに…」「原発事故後欲しかった赤ちゃんを妊娠したが、大丈夫かなあと思って、心が揺れた」等々、本来なら持たなくてもいい不安な気持ちを持って若いお母さん達が生活したかと思うと心が痛みました。

二本松の若い住職さんの話も聞きました。事故直後に沿岸部にボランティアで行った。幼稚園児を預かるために園庭の除染をしたことや、保養キャンプの様子を(熱く)語ってくれました。本来なら政府が行うべき事柄です。政



府の無策ぶりを改めて実感しました。

南相馬へも行きました。家屋が全部無くなっている地域を見て、津波の恐ろしさを実感しました。天災は人間の力では防げない部分もありますが、原発事故は明らかに人災です。人間が防げた事故でした。それなのに何事も無かったかのように原発を再稼働させようとしている人々がいる。もう一度原発事故が起こらないと目が覚めないのでしょうか。その時はもう遅いよ！

東野

原発は絶対にいらない！……再認識の旅

福島訪問のため6時前に家を出て、7時新大阪出発、11時半頃福島に着きました。線量が高い所なのにマスクをしている人も少なく、何事もなかったような風景でした。振津さんが持参した線量計の値を見て、初めて福島に来たという実感が湧きました。

「カーちゃんの力」の産直カフェ「カーちゃんわいわいふるさと農園」で福島の野菜を使ったランチを食べました。渡邊とみ子さんが忙しい中を駆けつけてくださいました。

その後、飯館村の菅野哲さんの案内で飯館村へ……。車窓からは、あちこちで「除染作業中」という看板を立て除染作業をされているのが見え



除染・石堀のコケを取る



並ぶビニール袋と夏椿

ました。広大な土地がきれいになるのか、気の遠くなるような思いがしました。荒れ果てた土地に黒いビニール袋に入れた除染後の土が置かれその前に咲いていた夏椿の白い花が切なく哀れに感じました。

飯館村役場にあった石碑に刻まれた歌(飯館村村歌)です。

『夢 大らかに』

山 美わしく
人 情ある

土 よく肥えて
水 清らかな

その名も飯館 わがふるさとよ

その名も飯館 わがふるさとよ

実りの稲田に
陽は照りはえて

みどりの林に
小鳥は歌い

続く阿武隈
山幸唄う

うらら春陽に
さわらび萌える

これが原発事故が起きる前の、私が写真で見た飯館村でした。

南相馬の小高地区では津波ですべてを失い、家のコンクリートの基礎だけが残り、廃墟となった暗く寂しい地に黄色い軍艦草が咲いていたのがより一層悲しく感じました。

夜、宿泊する「えびす庵」で飯館村の菅野哲さん、佐藤健太さん、楢葉町の佐藤龍彦さん、と交流させていただきました。その時、菅野さんが「貴重な財産を失いました。」と言われた一言が胸に突き刺さりました。

二日目は飯館村の若いママ達が「えびす庵」に集まりました。原発事故の後、放射能の中で何も知らずに普段通りの生活をしていたそうです。その中には妊娠中のママもおられました。

翌朝二本松に移動し、真行寺の住職さんのお話を聞きました。併設されている幼稚園の子ども達が楽しく遊んでいる姿を見て、昨日の飯館村の子ども達同様、未来が幸せでありますようにと祈らずにはいられませんでした。

午後は「3a郡山」(安全・安心・アクションin郡山)の「子ども達を守りたい！ふるさとを取り戻したい！」と願うママ達の事務所でお話を聞かせてもらいました。放射能汚染や被ばくを気遣う人々が、声を出しにくい雰囲気が強まる中で、頑張ることの難しさを日々感じておられるようでした。

この三日間で私は「絶対に原発はいらない」「これからの子どもたちを守るために原発を廃炉に」と再認識した旅となりました。

忙しい中、私たちの為に時間を割いてくださった皆様、いろいろお世話になりました。ありがとうございました。

K



2013年ゴーゴーワクワクキャンプ医療講習会

もうすぐ夏休み、各地で夏キャンプの準備が進められています。

《ゴーゴーワクワクキャンプ》

京都精華大学の学生さんとOBを中心に始めたゴーゴーワクワクキャンプも3年目になりました。「放射能から子ども達を守りたい」「関西で自分達ができることは何か」。若い人たちが強い思いを行動に移すのは素早く、2011年5月の連休からのスタートでした。一番乗りだったようにおもいます。

《楽しいイベント》

初年度、子ども達を受け入れるにあたり、あれこれの心配をよそに、竹を切り出して滑り台作りや、バンダの形の焼き釜での手作りピザを焼く、ネイティブアメリカンのテント遊びと、才能豊かな学生さん達でなければ

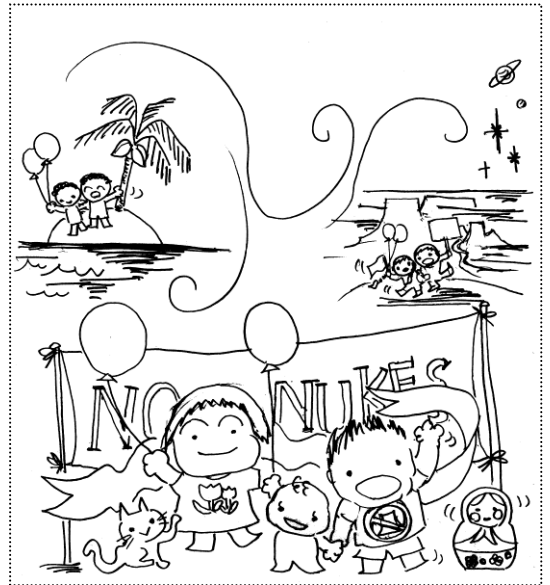
思いつかないような楽しみ満載のキャンプでした。いつも行動力と熱意に敬服です。

《「救援関西」も協力》

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」は、保養（キャンプ）の意義や役割をずっと皆さんにお知らせしてきましたが、人間的にも距離的にも直接手伝えません。で、子どもさんをあずかるための健康管理の講習会で協力することになりました。

《貴重な新しいボランティア》

2013年夏。あれから2年と4ヶ月、スタッフの経験や知識は豊富になり、ボランティア保険にも入って、場所も確保され、キャンプ仲間との連携も取れてきています。が、ふえた悩みもあります。世間の関心が減り、カンパも減り、学生たちへの広がりも難しくなっているとのこと。広がりへの足がかりは何と言っても、来てくれた新しいボランティア、新しい支援者です。



《7月7日医療講習会》

今年も、7月7日、京都三条の東山いきいき活動センターで、新しいボランティア対象の医療講習会を行いました。新しいボランティアが精華大・関西学院大・社会人から計7人参加。スタッフ・講師合わせて総勢16人が集まりました。先輩スタッフからキャンプの概要を説明、「救援関西」の長沢・猪又から「キャンプ参加学童の健康と安全」をテーマにお話しました。

《熱中症と「あせも」を先手で予防しよう》

栄養と睡眠、休息や暑さ対策のこと、安全のためのオリエンテーションの必要性和、見守りの責任体制については、キャンプを体験している先輩達の方がよく対策のハウツーを知っていました。しかし、今年はこの暑さです。熱中症で話しが盛り上がりました。水分を十分にとっても、「塩気を入れて飲む方が良いのか？」「ポカリスエットは良いのか？」「かえて脱水になると聞いた。」とか質問もぼんぼん出ました。昨年の反省で「あせも」はひどくなる前に、先手の対応（シャワーやぬれタオルで拭く）を提案しましたが、「何を塗ったら良いか？」「塗らなくても治るのか？」など熱心な意見交換ができました。

《最悪の時の準備：一応やってみました》

良くある怪我や虫さされの処置も関心が高く、「まず洗う」「軟膏を塗る」手順を確認しました。まれではあるが、最近話題になっている、「マダニ刺入症」「まむし咬症」の質問に、講師あたふたでした。最後に、あつてはならない・あったら困る「急変時の対応」。大声で人を呼び寄せる実技からやりました。「こどもは気道確保、人工呼吸2回してから胸骨圧迫よ！救急車を呼ぶ時は住所言わないと来ないよ！電話に住所と救急病院の番号書いておいて下さいね。！」…でした。

フレーフレー、ゴーワーク！ヒバクのない世界のために！子ども達の笑顔のために！

～8月3日 大阪講演・交流集会のご案内～

米先住民と連帯し

日本企業による先住民の聖地テイラー山でのウラン採掘計画に ストップを！！

米国南西部のニューメキシコ、アリゾナ、コロラド、ユタの州の境が交叉する「フォー・コーナース」周辺には、ナバホ、ホピ、アコマ、ラクゲーナなど多くの先住民が住んでいる。この先住民の土地に米国最大のウラン鉱脈がみつき、核兵器開発と原子力エネルギー推進のために、1940年代後半からウラン採掘が始まった。危険性も知らされずに、ウラン鉱山で働かされた先住民ウラン鉱夫の多くが肺がんなどの病気で亡くなっている。半世紀以上にわたるウラン採掘によって、この地域には、1000ヶ所を越えるウラン鉱山廃鉱と周辺の放射能汚染が残されている。2005年には、ナバホ・ネーション(ナバホ族の自治政府)は、ネーション内でのウラン採掘を禁止する法律を制定した。

「負の遺産」が残されたこの地域で、2009年から、日本の「住友商事」が参画して、新たなウラン採掘計画「ロカ・ホンダ、ウラン鉱床開発」プロジェクトが進められている。この鉱山開発予定地は、この地域の先住民の聖地である聖なるテイラー山の麓に位置している。私たちは、これまで、米国先住民と連帯し、日本全国の反原発、環境保護、先住

民との連帯に取り組む人々とともに、住友商事に抗議し、このウラン開発計画の中止を訴えてきた

東京電力福島第一原発事故による甚大な放射能汚染とヒバクがもたらされているにもかかわらず、日本政府と電力会社、原子力関連企業は、原発を再稼働させ維持推進しようとしている。そればかりか、政府は先頭切って、原発の輸出を行おうとしている。このような中で、「ロカ・ホンダ、ウラン鉱床開発」プロジェクトも、今年に入って現地の森林局から「環境影響評価報告」が出され、着々と準備が進められている。

今回、原水禁の招聘で、「安全な環境を求める複合連合」(MASE)と「ウラン採掘反対東部ナバホ・ディネ」(ENDAUM)のメンバーの、若い先住民活動家、レオナ・モルガンが来日する。そして、先住民の聖山での日本企業による新たなウラン開発への反対を訴える。広島・長崎での原水禁世界大会参加前に、レオナ・モルガンを迎えて、東京と大阪で、講演・交流集会を開催する。ぜひご参加を！

日時:8月3日(土)1時半～4時

場所:市民交流センター ひがしよどがわ 401号

JR新大阪駅の東口は階段が2か所あります。左側(北側、西淡路方面)の階段から降りて下さい。



カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2013.6.15～2013.7.19

旦保立子 和田長久 折口晴夫 折口晴夫 住吉純子 小副川久代 山崎知行 中山一郎 齊藤日出治
西尾漠 即得寺 森本良子 田原良次 中井かをり 松尾由美 長澤由美 伊藤勝義 梅原桂子 松本
邦夫

(順不同・敬称略)

ノボキャンプへの保養のための支援をよろしくお願い致します。

ベラルーシも現在は夏休み。チェルノブイリ事故の被災地クラスノポーリエから、子どもたちがロシアの非汚染地ソラージュの「ノボキャンプ」へ3週間の保養に出かけています。第1グループが終わり、第2グループの保養が7月17日から始まっています。若者が中心に運営しているこのキャンプは、ユニークで子どもたちにとっても人気があります。私たちが支援してきて6年目になります。今年も10人の費用(430ドル/人)の支援をしたいと考えていますが、まだ目標額には程遠い現状です。前号でもお願いしており、かさねがさねで大変恐縮ですが、どうぞカンパのご協力をよろしくお願い致します。なお既に御協力頂いた方には振込用紙の同封をご容赦ください。ご協力をよろしくお願い致します。



(ノボキャンプのHPより)

ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

0722-53-4644

郵便振替:00910-2-32752

口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西